

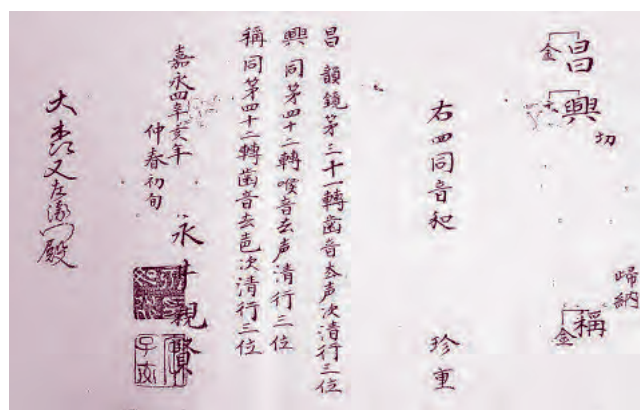
村人の印と実名

専門は近世史、江戸時代の村と人をテーマに研究をしています。

市史編さんで担当するテーマの一つは、村政やその担い手である村役人についてです。庄屋や組頭などの村役人は、村ではとても強い権力を持っているというイメージがあるかもしれませんが、そういった側面は間違いではありませんが、例えば領主への年貢収納では、村の代表者としての責任を果たす必要があります、一方で村人たちには、安定した生活ができるような指導や教育をする必要がありました。村の内外で頻発する争いを仲裁する立場でもあります。

また、日常的に多くの帳簿や証文を作成する事務があり、村役人は多忙を極めていたと考えられます。村政や村役人に関わる基礎史料として、領主の触れなどを村役人が書き留めた「御用留」がありますが、現在、近世史部会のメンバー全員で、上伊勢畑村の「御用留」の翻刻作業を進めているところです。

私は百姓が使用する印の研究を続けてきたため、印を使用する個人としての村人のあり方にも注目しています。村人たちが日常的に印を使用するようになったのは、江戸時代からです。そして江戸時代中期以降、印に彫る文字は、印を使用する本人の「実名」となっていく傾向にあるようです。実名はしかるべき知識人から授けられるようですが、市域では、嘉永4年(1851)に高部村の大森家4代又左衛門が、「昌興」の実名を授けられた時の史料があります。



▲嘉永4年「応求考之」(大森家文書790)部分



近世史部会専門調査員 千葉 真由美 氏
(茨城大学教育学部准教授)

また、姓名ということでは、水戸藩領の村々には、村人の苗字を申告させた「姓名帳」「姓名控帳」などの史料が残されています。公的には名乗ることがほとんどなかった百姓の苗字を、藩が調べたことも大変興味深いものです。百姓の家の由緒意識にもつながり、家と人のあり方にも着目できると考えます。

そして女性、子供、高齢者の問題も重要です。これらのテーマは過去のことではなく、現在の社会問題にもつながります。近世の人々が、社会の中で力強く生きていく姿、教科書にはあまり載ることのない側面も紹介できればと思っています。



■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)